

10年間でやった大事なことを整理します。五つに分けられます。

1) 自然農法研究所の研究の基本的態度は迷い続けました。応用研究も様々に分けられますが、選んだのは農家の作業を念頭においた研究です。工場の技術者が生産工程の様々な問題を解決する為行なう研究と似ています。米倉さんは十分理解してくれたようで、成果は学会の大会で口頭発表しても恥ずかしくないのを目標としました。現状は満足です。

2) 大仁農場の環境汚染防止で、安全委員会をつくり、金山委員長のもと、畠中君が大変努力してくれました。排出基準が100PPMでよいのに、契約は3PPMになっており、事実上不可能です。問題は研究所排水、生活排水、家畜の汚水の三つです。第一はきつい内部基準をつくったものの、汚水はB池に入り、第二の民家周辺の汚水が糞尿を除きB池に、女子寮の汚水もB池の延長で合流して大沢川に出ます。対策はありません。第三の家畜の汚水は、ガチョウ池でPALの排水と合わさり、農場の正門付近から入ってA池に入り、小川から大沢川に入るので、これも3PPMの対象になります。抜本的な対策なしでは解決不可能で、水野さんに今後を託します。

3) EMの問題が単に世界救世教の新生派内部の問題ではないのに気付いて、MOAの名誉と関係すると判断し、行動する気持ちになりました。このことは大事です。EMは内部の問題ではないのです。今後非包括法人として活躍されるときに、社会、特に農業の関係者にはEMに恨みを持っている人が多いので、彼らにいつでも説明できる論理をもつ必要があると思います。微応研としては学術委員会の決定で土壌肥料学会に研究を委嘱し、成果を発表してもらった、と云う点で、間接的にEMを非難する立場となりました。

4) 生命研建設関係では、三つの意図がありました。第一は農場の環境汚染と関係し、移動したかったこと、第二は財団が自農から微応研に移る以上、微生物の学術研究は不可避であること、第三は農業研究だけでは今後無理で、食の健康を含む品質研究をする必要があること、以上です。第二は田淵君に迷惑を

考えられなかつ

た。第二はインターの出口さんと知合ったことから、私の夢は現実となりはじめ、今中川君に今後を託しています。ただ生命研の運営形態は今の方法では無理で、MOAの理科の学卒の数から、総合化という抜本的な方策が必要で、五百川さん期待します。

5) 二つのビデオを完成したのは大変な思い出です。「土の世界から」は数々の栄誉をえました。「大地、食べもの、からだ」は志賀先生に身土不二のアイデアを頂き、いささか内容が過ぎたものとなったのですが、ともあれ完成できて、これも二～三の栄誉をいただきました。一年前宮島さんから、MOAの森林に対する姿勢をまとめてくれ、と依頼され、努力しましたが、未だまとまっていません。「自然崇拜と森林利用」とでもいった文章を今、まとめています。今後も努力しますので、なんらかの形で公表していただければ幸いです。